

# 黄金山の歴史・文化的景観について

Historical and cultural landscape of Mt. Kogane  
in Hamamasu Ward, Ishikari City, Hokkaido

荒山 千恵\*

Chie ARAYAMA\*

**キーワード：**石狩市浜益区，黄金山，ピンネ タイオルッペ，タヨロウシへ，歴史・文化的景観

## 1. はじめに

黄金山（石狩市浜益区実田）は、浜益区の中央部に位置し、暑寒別天売焼尻国定公園区域の南端に含まれる（図1）。黄金山の東側には黄金沢川が流れ、浜益川中流付近に合流する。「浜益富士」や「黄金富士」とも称され（石橋源1980: 6）、浜益川河口から北東側に眺める景観は、遠方に連なる山々を背景に富士山に似た形状をみせる。アイヌ語では「ピンネ タイオルッペ」（木原にそびえる雄山）や「タヨロウシへ」（ミズキの生えているところ）の名称が知られている。また、黄金山を中心とする一帯はユカㇿに登場する英雄ポイヤウンペの拠点とする言説でも知られている



図1. 黄金山の位置.

（金田一，1918<sup>（注1）</sup>；石狩市教育委員会，2008；石橋孝，2007；2009ほか）。黄金山（ピンネ タイオルッペ）は2009年に国指定名勝「ピリカノカ」の一つに指定されている。

黄金山は、「浜益富士」の名称のとおり左右に裾野を広げる姿で知られているが、その山容は展望する位置によって大きく変化する。その要因は、黄金山のもつ成因に由来する。本稿では、黄金山をランドマークとする歴史・文化的景観を考察するための試みとして、第一に、江戸・明治期の記述や絵図にみられる黄金山の事例を取り上げ、黄金山がどのように記され、描かれていたかを取り上げる。第二に、ユカㇿの発祥地をめぐる諸説や黄金山のアイヌ語名称の語源に関する先行研究の見解をとおして、黄金山をランドマークとする景観がどのように捉えられてきかを確認する。第三に、黄金山が展望される現在の位置と山容の変化を位置情報と合わせて記録し、「浜益富士」と呼ばれる山容をみせる景観が展望される地理的範囲について記す。なお、本稿のうち「2. 黄金山の成因」については、志賀健司の教示のもと執筆した。

## 2. 黄金山の成因

暑寒別山地周辺には、後期中新世から前期更新世にかけての火成活動によって形成された火山体

\* 石狩市教育委員会生涯学習部文化財課（併任，学芸員） 現：いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

が多数見られる（中川ほか，1993）。黄金山（739.1m）もその1つで，中新統の逆川層および於札内層を貫く安山岩質の貫入岩（後期中新世～鮮新世；約1200万年前～約260万年前）を母体とする。山体の上半部は解析を受け，西北西－東南東方向に長軸を持つ，柱状節理の発達した板状の岩体が露出している（秦ほか，1957）。

### 3. 黄金山の名称と山容の記録

江戸後半期から明治初頭までを中心に，絵図や古地図等にみられる「黄金山」の記録について，その例をa)～l)に取り上げる。下線は筆者が黄金山の名称に該当する部分に引いたものである。なお，このほかに，『日本歴史地名体系第一巻 北海道の地名』の「黄金山」（永井（監），2003：733）を参照した。

a) 谷口青山の描いた『自高島至斜里沿岸二十三図』（1798（寛政10））「濱マシケ 三」の絵図に黄金山が描かれ，添えられた記述の中に，「（前略）谷ノ奥ニコカ子山ト云山突出ス其色黒」とある（図2）。

b) 近藤重蔵は，1797（寛政9）年に絵図を幕府に提出している。東京大学史料編纂所蔵「蝦夷地絵図」には，突出するような山容を描いた「コカ子山」の記載がみられる。『新札幌市史』（第1

巻，通史1）に絵図の掲載がある（札幌市教育委員会編，1989：509）。

c) 磯谷則吉の『蝦夷道中記』（1801（享和1））には，「此名黄金山ト云アリ又タヨロシヘとて 義経の古跡アリ」とあり，「黄金山」と「タヨロシヘ」の名称が記されている（磯谷，1801：23（北海道大学北方資料データベース）北海道大学附属図書館）。

d) 今井寛治郎（編）「蝦夷地図」1807（文化4）年の古地図には，「小金山」の記載がみられる（図3）。

e) 館野瑞元による1808（文化5）年の書状に，次のとおり記載がある。

「又帆を揚て走れば未刻過てハママシケに至る。此地兩岸切たる如き間也。舎吏に当てコカ子山と言あり。沢辺に出て貌猪口皿を伏したる如くにして衆峰に秀たり。是又霊山。」とある（高倉編，1982：479）。

f) 玉蟲左太夫『入北記』には，1857（安政4）年に，次のとおり記述がある。

「又遙ニ突兀タル山アリハママシケ領小金山ナリ。古来ヨリ山頂へ登ル人ナシト云フ。（玉蟲，1992：72）



図2. 谷口青山『自高島至斜里／沿岸二十三図』（函館市中央図書館所蔵）。



図3. 今井寛治郎編『蝦夷地図』※画像は該当部分（写本／函館市中央図書館所蔵）。

g) 松浦武四郎『西蝦夷日誌』「五編」（文久4年仲冬 自序-明治4年彌生 跋文, 1864-1871）には、「濱益毛〔濱益〕」の項で、次のように記している。

「左りにタイルベシベ（丸山）といふ<sup>スズリバシ</sup>雷盆を伏たる如き山あり、和人これをコガネ〔黄金〕山と云。其後ろに廻り、源はアヲラ岳と云、石狩樺戸の山に到るよし。一説、昔し此タイルベは義経公が住居し給ひしと云、其時甲冑を置れしが、今化して皆蝮蛇に成て有と云傳ひ、また文亀天正の頃に金坑盛にありし故號とも云り。」

（松浦, 吉田編, 1962: 216-217）

h) 松浦竹四郎『北海道国郡全図』（1869（明治2）／開拓使蔵版）には、古地図に「コカ子山」の記載がみられる（図4）。

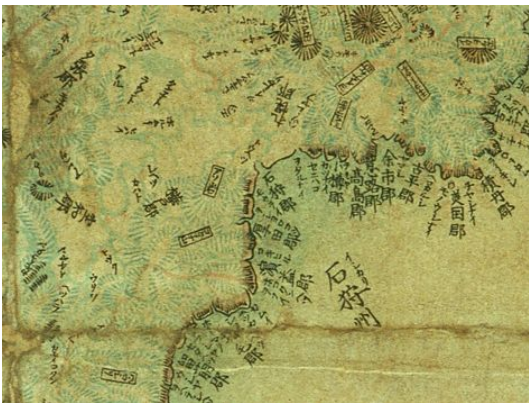


図4. 松浦竹四郎『北海道国郡全図』※画像は該当部分（北海道大学附属図書館所蔵）。

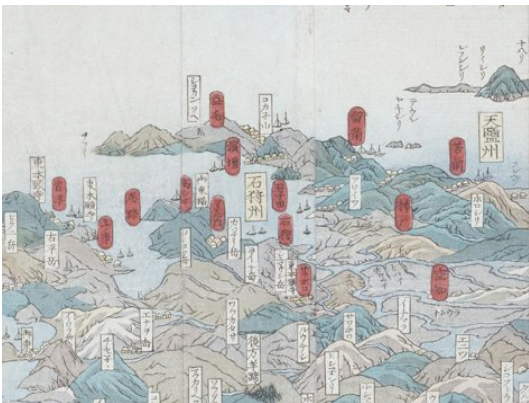


図5. 松浦武四郎『千島一覽 明治三年』※画像は該当部分（函館市中央図書館所蔵）。

i) 松浦武四郎『千島一覽 明治三年』（1870（明治3）／出版者：和泉屋市兵衛）には、「コカ子山」の記載がみられる（図5）。

j) 目賀田帯刀『北海道歴検図』「石狩州（下）」（1871（明治4））の「小金山」とある鳥瞰図には「益毛岳」と付された絵図が描かれ（図6）、「浜益山道 其7」の鳥瞰図には絵図の中に「小金山」と付された特徴的な山容が描かれている（図7）。

『北海道歴検図』「石狩州（下）」については、北海道大学北方資料データベースの内容説明



図6. 目賀田帯刀『北海道歴検図』「石狩州（下）／小金山」（北海道大学附属図書館所蔵）。



図7. 目賀田帯刀『北海道歴検図』「石狩州（下）／浜益山道 其7」（北海道大学附属図書館所蔵）。



に、「安政3～5年幕命により北海道，樺太を調査測量した幕吏目賀田（谷文晁の女婿）が各地の沿岸を描いた鳥瞰図。これは明治4年開拓使の要請で自らの「延叙歴検真図」をもとに清書して提出したもの。」とある（注2）。

k) 『石狩国浜益郡地図』（1873（明治6））には，浜益郡海岸の見取図が描かれる。開拓使編輯課印がある（注3）。見取図には「黄金山」の絵図が紙の凸部分に名称とともに描かれている（図8）。

l) 『浜益郡之図』とされる見取図で，建網・差網の間口・奥行・氏名が記されている。開拓使編輯課の印がある（注4）。年代の記載はない。本図の上部（紙の凸部分）に示す抜粋図には，川筋が内陸に伸びた左奥に突出した山容を描き「コカ子山」と記している（図9）。海側から俯瞰した見取図の中にも名称は記されていないが，同様の形状により黄金山が描かれている。

上記に取り上げた，江戸後半期から明治初頭に見る黄金山の名称では，「コカ子山」「小金山」の表記が目立つ。『蝦夷道中記』（磯谷，1801）



図8. 『石狩国浜益郡地図』※画像は該当部分，右は「黄金山」の部分拡大（北海道大学附属図書館所蔵／画像は筆者撮影）。



図9. 『浜益郡之図』※画像は該当部分，右は「コカ子山」の部分拡大（北海道大学附属図書館所蔵／画像は筆者撮影）。

と『石狩国浜益郡地図』（開拓使編輯課, 1873）には「黄金山」の表記がみられ、『蝦夷道中記』には「タヨロシヘ」の名称が併記されている（注5）。なお、その後に発行された明治中頃の地図の名称では、1893（明治26）年初版の「二十萬分ノ一 北海道実測地図」（図名「増毛」）、および1897（明治30）年発行の5万分の1地形図（図名「茂生」）に、いずれも「黄金山」と表記している。

山容については、『自高島至斜里沿岸二十三図』（谷口, 1798）に「其色黒」、館野の書状（高倉, 1982）に「貌猪口皿を伏したる如く」とあり、色彩や形状について記している。また、絵図に表現される山容では、台形状を呈し、左右対象に突き出すような斜面を描くもの、裾野を広げるとような輪郭を描くもの、山頂の平坦部が目立つものなど、特徴的な形状を表現して図示したものが確認される。

黄金山の性格に関わる記述としては、主に二つある。一つは、館野の書状（同上）に「靈山」とあり、『入北記』（玉蟲, 1857）には「古来ヨリ山頂へ登ル人ナシト云フ」とある。石狩市教育委員会（2008）による資料「黄金山」にあるように、『入北記』にみる一文は、入山禁止などの禁忌をともなった規制の可能性を窺わせる記述といえる。なお、現在の黄金山では山開きが毎年行われ登山が可能である。もう一つは、『蝦夷道中記』（磯谷, 1801）や『西蝦夷日誌』（松浦, 吉田編, 1962）に「義経」の伝承についての記述がみられる。

#### 4. 黄金山に関する歴史・文化的景観

本項では、アイヌの伝承や信仰、アイヌ語の名称の語源に関する1970年代以降の文献・論考から、黄金山をランドマークとする歴史・文化的景観を考える手がかりとして、m)～q) について取り上げる。下線は、前項と同様に筆者が黄金山の名称に該当する部分に引いたものである。

ユカラの発祥地をめぐる地名や黄金山のアイヌ語名称については諸説あるが、黄金山周辺の川や沢を含めた地形的な関わりに由来することが考えられており、また、黄金山を浜益川の西側にある摺鉢山と対にして「男山」「女山」とされるなど、アイヌの伝承では自然地理的な一帯の景観のなかで黄金山が捉えられている。

m) 久保寺逸彦の『アイヌの文学』（1977）では、「VII 英雄詞曲と婦女詞曲」の中で、「ユカラの発祥地は石狩川の川口近い浜益（古くは、浜増毛）のシヌタップカ（Shinutapka）」とされることについて、トメサンベツ（Tomesanpechi）とともに今日の地名として存在しないこれらの呼名の諸説がそれぞれ述べられている。黄金山および周辺の景観に関係することから、以下に引用する。また、本章の中には、昭和10年に久保寺が撮影した黄金山・摺鉢山・愛冠岬・毘砂別川の写真が掲載されている（久保寺, 1977: 171-175）。

「Shinutapkaについては、四説ある。その一説は、黄金山（一名浜益富士）Pinne tai-orushpe（木原に聳える雄山の義。標高七四〇メートル）、その二説は、摺鉢山Matne tai-orushpe（木原に聳える雌山の義。黄金山とともに、夫婦の山といわれている）、その三説は、浜益の南端に突出して断崖をなす海岬、「愛冠岬 Aikap」上の高地をもってこれに擬するもの、その四説は、愛冠岬より数町北に当たって、海岸に迫る丘陵をもってこれに擬するものであるが、判然としない。」（久保寺, 1977: 172-173）

「Tomesanpechiについても三説ある。その一は、黄金山および摺鉢山に沿うて流れる浜益川をそれというもの、その二は、浜益川の南を流れて、川口近くで浜益川に合流する黄金川をもってこれなりとするもの、三は、愛冠岬近く柏木部落を流れる毘砂別川 Pit-san-pet（急流なれば、「小石流れ下る川」の義か）をもって然りとするものなどあって、これも定めがたい。」（久保寺, 1977: 173）

n) 『北海道地名誌』には、「黄金山」について次のように記している。

「黄金山 739.5m。沖合から舟子たちの目印になった山。アイヌ語は「ピンネ・タユル・ウシ・ペ」で、男の林の道のある山の意で、この山の裏西にある丸山を女性として名づけたもの。「オツカイ・ヌプリ」（男山）ともいったといい、伝説の山である。」（NHK北海道本部編, 1975: 67）

o) 山田秀三は、「黄金山」「黄金沢」の解説の中で次のように記している。

「タイルベシペをそのままに読めば tai-rupeshpe（林の・峠道沢）となるが、久保寺逸彦博士はアイヌ文学の中で「黄金山（一名浜益富士）。ピンネ・タヨルシペ pinne-tai-or-ushpe（木原に聳える雄山）の義」と書き、下流南岸の摺鉢山と夫婦の山であったといわれ、ここもユーカラの少年英雄ポイヤウンベのチャシ（居館）のあった処だとの説があることを述べられた。」（山田, 1984: 119-120）

p) 榊原正文による『データベース アイヌ語地名』では、「ピンネタヨルシペ < ピンネタイオロウシペ」（pinne-tay-or'-us-pe < pinne-tay-oro-us-pe）の項目で、黄金山について記し（2002, 201-202）、黄金山の写真も掲載されている（榊原, 2002: 216）。備考では、「タイルベシペ」の名称について、次のとおり記している。

「なお、「北海道の地名」の文中にもある「タイルベシペ」については、「タイルベシペ tay-rupespe（林の・峠道沢）」と解することが出来るが、通常、これは河川（または、谷間）を表すアイヌ語地名と考えられる。

また、この地名も前項同様に、重母音のセットから「o」が脱落して、「タヨルシペ」となったと推定される。」（榊原, 2002: 202）

q) 児島恭子は、「義経伝説の地名」と題する論考で「浜益の義経」について記し、その中で黄金山の名称について、次のように記している。

「なお、黄金山の名は、金山があつて和人の鋤夫が入つたためについたとされる。山の名として古記に記されているタイルベシペ、タイオルシペなどは、川の名であつて山ではない。初回に書いたように湖はただトー（湖）とよばれていたのと同じで、もともと山の名はないのがふつうで、名づけたときはそこを水源とする川の名で呼ばれるようになったのが多い。また、カムイにちなむなにかの伝説があつて、そこから名づけられた山もある。」（児島, 2016: 115）

## 5. 黄金山の景観と現地記録

黄金山の景観についての写真記録は、A: 2021年4月12日、B: 2021年10月25日、C: 2022年6月2日に撮影した。撮影日Aは一部に残雪が残る春季で近隣の草木で芽吹きが始まる時期、撮影日Bは近隣の山々で紅葉が進む秋季で草木が枯葉に変わる時期である。撮影日A・Bでは、浜益川とほぼ平行して東西に走る国道451号線沿線および周辺の道脇から黄金山が見える位置を確認した。また、撮影日Cでは、新たに国道451号線から南側に離れた柏木からの展望を撮影した。A・B・Cの調査範囲で黄金山の展望した位置を★で示し、番号を西から東に付した（図10）。図10の位置番号と写真図版の番号は対応している（写真1～10）。

写真1は柏木の西側、写真2は浜益川の河口近くからの景観である。いずれも、国道231号線沿に位置し、黄金山を周辺の山並みとともに一望することができる。特に、広域的な景観で黄金山と摺鉢山の両者を望むことができるのはこの辺りとなる。

写真1～3の位置にみる黄金山では、左右対称の輪郭と滑らかな稜線がみられ、頂上部は尖らずに平坦な形状である。黄金山の手前には低く緩やかな起伏が重なっているため、位置によっては裾

部までは見られない。写真4では頂上部付近のみが見え、左右均等で山頂が平坦な形状が確認される。

国道231号線と451号線が交わる起点から東側へ6 km過ぎから7 km付近になると、黄金山の輪郭や表面にやや凹凸がみられ、それまで目立たなかった灰褐色に露出した部分が右側の山肌に見えるようになる（写真5～7）。

起点から東側に8 km付近になると、凹凸や山肌の露出部分がさらに目立つようになる（写真8）。写真8は黄金橋の近くから展望したものである。

起点から東側へ11km付近の浜益区御料地から望む黄金山の姿では、形状が左右対象ではなく、特に右側の輪郭が張り出している。また、山肌に見られる灰色の露出部が中央部位置に現れる（写真9）。さらに、今回の記録で最も起点から東側に離れた12.5km付近から望む黄金山では、それまで平坦であった頂上部が尖った形状となり、緩やかに裾野を広げた「浜益富士」の山容とは大きく変化する（写真10）。

## 6. まとめと課題

江戸・明治期の絵図に残る黄金山では、山頂を平坦に描いた台形状を呈するものや富士山のような左右対称に裾野を広げる山容を描くものが確認された。これらは、主に日本海沿岸寄りの西側か

ら望む山容を表現したものと考えられる。当時の日本海岸沿いの巡検ルートや浜益川下流に位置する集落から北東方向へ黄金山を展望したことが推察される。一方、「浜益富士」とは異なる山容が顕著になるのは、浜益区の御料地付近で見られるようになる。このような黄金山の形状の変化を記録・絵図や伝承のなかで触れたものが存在するのか、黄金山にみる多様な姿が神聖な存在として信仰などに関わりがあるのかどうかは今後の課題である。黄金山を展望する歴史・文化的景観に関する伝承や信仰を含めた考察は、小稿では基礎資料の概観にとどまるため、さらに網羅的な資料集積とともに検討していく必要がある。また、毘砂別や群別などの広域からみる黄金山の地理的景観を含めた検討も必要である。今後も、黄金山をランドマークとする当該地域の景観について、歴史・文化的視点と自然地理的な視点による双方から検討していきたい。

**謝辞：**本稿作成にあたり、函館市中央図書館、北海道大学附属図書館にお世話になりました。また、石狩市教育委員会文化財課職員の皆様、石狩市学芸協力員の石橋孝夫氏にご協力を賜りました。末筆ながら心より御礼申し上げます。

注1 金田一京助「アイヌの詞曲について」の原典については、「大正7年1月「アララギ」11-1（アララギ発行所）に掲載。」とある（金田一京助全集編集委員会、1992:410）。

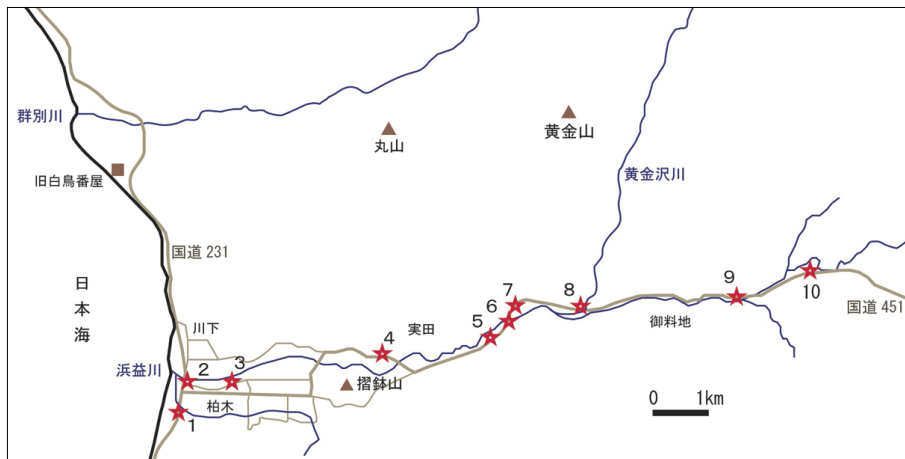


図10. 撮影位置概略図。

注2 内容説明は、北海道大学北方資料データベースの次のURLより引用した。

<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0D023840000011000>

注3 北海道大学北方資料データベースの内容説明を参照した。

<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0D012810000000000>

注4 北海道大学北方資料データベースの内容説明を参照した。

<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0D012820000000000>

注5 『日本歴史地名体系第一巻 北海道の地名』の「黄金山」（永井（監），2003：733）によると、「西蝦夷地名考」に、「本名タヨロウシへ、タヨロとは水木の事、ウシへとは生てある事をいふ也。此山に水木多くある故に名とす。コガ子山とは本邦の人の名付し也」と山名の由来について記す、とある。

### 引用文献・図出典

開拓使編輯課，1873. 石狩国浜益郡地図. 北海道大学附属図書館所蔵.

開拓使編輯課，-. 浜益郡之図. 北海道大学附属図書館所蔵.

北海道庁編纂，1893. 増毛. 二十萬分ノ一北海道実測地図.

今井寛治郎編，1807. 蝦夷地図（写本）. 函館市中央図書館所蔵.

石橋源編著，1980. 浜益村史. 浜益村.

石橋孝夫，2007. 浜益アイヌの聖地 黄金山. エスチュアリ（いしかり砂丘の風資料館だより）. No.28.

石橋孝夫，2009. いしかり博物誌101 黄金山ピンネタイオルッペ. 広報いしかり（2009年7月）. 石狩市.

石狩市教育委員会，2008. 黄金山，浜益区黄金山のアイヌ文化に関連する名勝指定に関する資料.

磯谷則吉，1801. 蝦夷道中記（写本）. 北海道大学附属図書館所蔵.

金田一京助，1918（金田一京助全集編集委員会編，1992）. アイヌの詩曲について. 金田一京助全集 アイヌ文学Ⅰ. 三省堂，7：60-67.

金田一京助全集編集委員会編，1992. 解題・書誌. 金田一京助全集. アイヌ文学Ⅰ. 三省堂，7：409-411.

児島恭子，2016. アイヌ語と地名（3）義経伝説の地名. 地名と風土. 10：111-115.

久保寺逸彦，1977. アイヌの文学. 岩波書店.

松浦武四郎，吉田常吉（編），1962. 西蝦夷日誌・五編，時事新書 蝦夷日誌（下）. 時事通信社，184-226.

松浦竹四郎，1869. 北海道国郡全図. 開拓使蔵版. 北海道大学附属図書館所蔵.

松浦武四郎，1870. 千島一覽 明治三年. 芝明神前 和泉屋市兵衛版. 函館市中央図書館所蔵.

目賀田帯刀，1871. 石狩州（下）／浜益山道 其7. 北海道歴史図. 北海道大学附属図書館所蔵.

目賀田帯刀，1871. 石狩州（下）／小金山. 北海道歴史図. 北海道大学附属図書館所蔵.

永井秀夫（監修），2003. 黄金山. 北海道の地名，日本歴史地名大系. 平凡社，1.

中川光弘・後藤芳彦・新井計雄・和田恵治・板谷徹丸，1993. 中部北海道，滝川地域の中新世－鮮新世玄武岩のK-Ar年代と主成分化学組成：東北日本弧－千島弧，島弧会合部の玄武岩単成火山群. 岩鉱，88：390-401.

NHK北海道本部編，1975. 北海道地名誌. 北海道教育評論社.

陸地測量部，1897. 茂生. 5万分の1地形図.（国土地理院リスト番号:45-11-6）.

札幌市教育委員会編，1989. 新札幌市史. 第1巻 通史Ⅰ，札幌市.

榊原正人，2002. データベース アイヌ語地名3，石狩Ⅱ. 北海道出版企画センター.

秦光男・山口昇一，1957. 5万分の1地質図幅「浜益」，図番03[旭川]-050，同説明書. 地質調査所.

高倉新一郎編，1982. 16 館野瑞元 宗谷よりの書状二通. 犀川会資料 全. 北海道出版企画センター，463-492.

玉蟲左太夫，稲葉一郎（解説），1992（1857）. 入北記－蝦夷地・樺太巡見日誌. 北海道出版企画センター.

谷口青山，1798. 自高島至斜里／沿岸二十三図. 函館市中央図書館所蔵.

山田秀三，1984. 北海道の地名. 北海道新聞社.





写真1. 柏木から望む黄金山（左），右に摺鉢山（★1／撮影：C）.

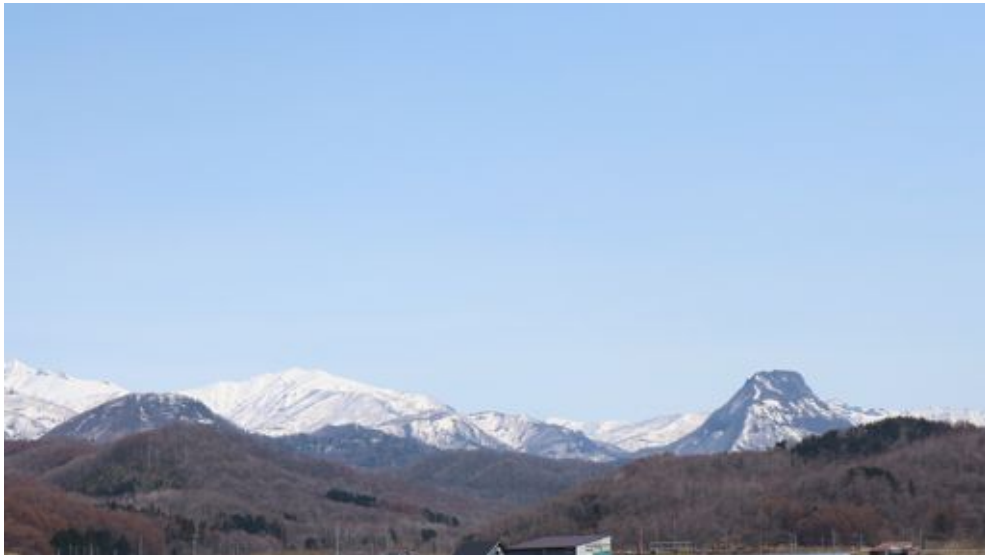


写真2. 浜益川河口近くから望む黄金山（右），左に丸山（★2／撮影：A）.



写真3. 裾野を広げる黄金山（★3／撮影：B）.

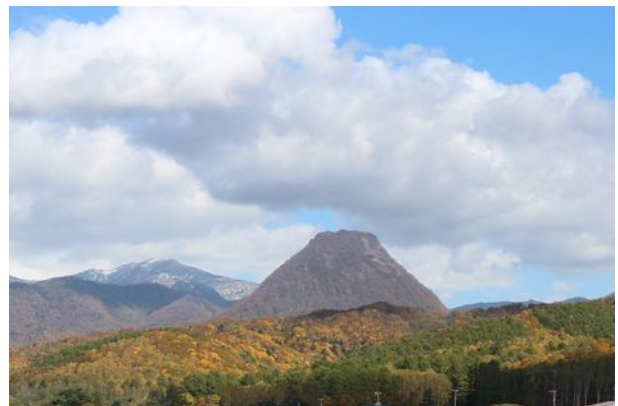


写真4. 頂上部をみせる黄金山（★4／撮影：B）.



写真5. 黄金山と周辺の山並み (★5 / 撮影：B) .



写真6. 黒味を帯びた春季の黄金山 (★6 / 撮影：A) .



写真7. 黄金山の山頂部が見える (★7 / 撮影：A) .



写真8. 黄金山の山頂平坦部の形状に変化 (★8 / 撮影：A) .



写真9. 黄金山の山頂部を含めた山容が大きく変化 (★9 / 撮影：A) .



写真10. 黄金山の山頂部が尖り左右非対称 (★10 / 撮影：B) .